



平成30年10月1日(月)

藤 棚

第358号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>
<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

秋風の快さに

校長 小川義男

銀杏の葉の出そろうのを楽しみにしているうちに、もう葉が黄色く色づくのを楽しみにする頃になった。寝室の窓から、名月が見えた。中秋の名月というのがこれかなあ、と思いながら、カーテンを閉めず、眠りについた。月に見守られながら眠るのは、久しぶりのことである。

夏至と思う間もなく秋分となり、朝夕は肌寒いことさえあるようになった。猛暑の夏、蝉が鳴かなかった。キリギリスの声も聞かなかったように思う。鈴虫くらいは、季節の深まりと共に鳴いてくれるのか、分からぬが、猛暑の夏は、虫の声にまで影を投ずるのであろうか。

冷泉家嫡流の女性の歌を、ラジオで聴いたことがある。

月宿る
庭の 小草の下露に
濡れて一夜を 鳴き明かす虫

というのだったと思う。

それどころではない、三年生は、戦いも終盤戦にさしかかっている。闘志を燃やし、最後まで己の可能性に挑戦して欲しい。

実は、青春を振り返って私には後悔がある。私は、高卒で田舎の英語教師になり、四年の後、北海道学芸大学札幌分校に進学したのだが、その後半、特に大学四年の一、二、三月は貧窮に苦しんだ。卒業して小学校教師になり、赤平橋を渡って、赤間小学校に続くなだらかな坂道を上っていったときには、「ああ、これからは、日々の生活に苦しまなくて済むんだなあ」としみじみ思った。あの時の嬉しさは、今も忘れない。

後悔とは、私が大学に進学したことである。日大か中大の通信教育を受けて、独学を進めれば、教員の資格は取れたし、念願の司法試験をも突破できたと思う。18歳から教員住宅に閉じこも

り、五年もすれば、志を果たすことができたと思う。集中力も記憶力も最高の五年間を、私は、無駄にしてしまったのではないだろうか。

白玉の

齒にしみとほる 秋の夜の

酒は静かに 飲むべかりけり (牧水)

という歌が好きであったが、酒を飲めない私は、少し高い金を出して、相馬焼きの茶セットを求め、孤独の無聊を慰めた。

その後、大学院も博士課程まで進んだが、私は、あのまま多度志村に座り込んで学問に専念した方が大成できたのではないかと思う。

だが、周囲に、嫉妬から足を引っ張る人物は居ても、透徹した人生観で、私の人生の進路を導いて下さる人はいなかった。

私は、広っばで、己の可能性に挑戦したかったのかも知れない。大学で、有名人にはなったが、それが人生に大きなプラスをもたらしたとは思わない。私は、次の人生の存在を確信している人間だが、この次は、農村に土着して、次の可能性に挑戦したいと思う。

三年生は、今や戦闘直前である。長い準備期間はあっても良いが、私は大抵の課題は、燃えに燃えて戦えば三ヶ月で目的を達成できると確信している。

浪人は、心血を注いで戦った、その後の課題である。今は目前のテーマに向かって戦え。命がけで努力すれば、勝ち取れない目標などあるものか。

カレーライス 立山プリンスと狭丘祭カレー

中学校が立山に登山していた頃、帰りに立山プリンスホテルで、カレーライスを食べた。その旨さは絶妙で、これ以上のカレーを私は知らない。横須賀の「海軍カレー」など、及びもつかぬ旨さである。

おまけに、ここは食べ放題だ。あまりの旨さに、私も三杯食べた。慎重な女生徒も、お代わりは普通だったし、三杯という頼もしい人もいた。男子では、六杯という強者がいたから、その旨さは格別のものだったのであろう。

立山は、三千メートルとは言いながら、一の越山荘からは、標高差 300 と少しだ。登れぬ山ではない。これを廃止したのは、天候の不安定性もあるが、決定的なのは、そこに風呂がないことである。私は、一人で行ったとき、「特別室はないのか」と聞いて、山小屋の親父にどやされた。

「何、お前、山小屋にスイートでもあると思うのか」と彼は言った。だが女生徒は、この一の越山荘に、風呂がないのが我慢できなかつたようである。「それじゃあ、縦走など生涯できないな」と思ったが、結局、翌年から、経路を変えることにした。学園祭の入間市の人たちの作るカレーは、プリンスに負けない。ルーを使わぬ、彼ら独自のカレーなのである。災害時に風呂などなくとも生き抜ける逞しさを失ってはならぬ。そう思いつつ、私は、来年の学園祭カレーを楽しみにしている。